

みやこの近代

78

高木 博志

明治維新と賀茂祭

維新の激動のなかで慶応四(一八六八)年四月十九日には、戊辰戦争のため賀茂祭に勅使は発遣されない。つづく明治二(一八六九)年三月の東京遷都により天皇とともに多くの公家は東京へと移住する。残された冷泉為理は、明治三年四月二十五日の日記のなかで、勅使(近衛使)・内蔵使・山城使の廃止、宮中の儀の廃絶、京都神祇官出張より路頭の儀の開始、といった諸改革を嘆く。

この明治三年度をもって、勅祭としての賀茂祭は中絶するが、とくに「宮中の儀」がなくなる点が、平安時代以来の王権との違いを際立たせるものがある。

明治維新と京都を考えた上で、この明治二年の

東京遷都の意義は大きい。東京遷都により、山城国を中心とする地域社会と朝廷とのつながりが断ち切られ、全国のどの地域にも平等で等距離な近代天皇制が形成されてゆく。そのなかで神社秩序も同様であり、古代以来の畿内を中心とする賀茂社・石清水八幡宮など二十二社の秩序から、伊勢神宮を中心とする全国的な官国幣社の秩序へと編成されてゆく。古代以来、山城国に基盤をおいていた朝廷を、東京へと離脱させるのである。

そして賀茂祭と宮中との関係の変化は、ある意味で朝廷のあり方の変化を象徴する。近世の宮中においては、正月に畿内に居住する陰陽師や千寿

古都の伝統保存へ「儀式」整う

万歳、猿回しといった賤視ももなった芸能者が天皇の前で寿ぎ、延暦寺や東寺、門跡といった僧形のものが祝いに来た。そして節分やお盆の灯籠のときなど、庶民が御所の築地の中に入りする

ように、さまざまなもの共存し活気ある場が、前近代の京都御所であった。宮中の四季は、京都盆地の社寺や人々の時と交歓しながら移ろいだ。京都の人々は、東山や嵐山の桜をみたその足で、

公家町の「初花を急ぐ」近衛の糸桜をおもい、菊亭家の見返り桜を愛でた。人々は、身近な存在であった天皇や公家たちとともに、祭りや年中行事を楽しんだ。しかし東京遷都後、江戸城の將軍と江戸の町の人々との交流も絶え、城壁に囲まれ隔絶した皇居の天皇は、全国を「同視」し、京都など特定の地域社会とのつながりを断ち切られてゆくのである。

こうして再興された近代の賀茂祭は、東京の皇居とは基本的に関係のない古都の新しい「伝統」文化であり、華やかな斎王代と女人行列も、一九五六(昭和三十一年)に観光振興から創作されたのである。

斎王代を中心にした女人列。1956年に観光振興のために新たに加えられた(04年5月15日)



公家町の「初花を急ぐ」近衛の糸桜をおもい、菊亭家の見返り桜を愛でた。人々は、身近な存在であった天皇や公家たちとともに、祭りや年中行事を楽しんだ。しかし東京遷都後、江戸城の將軍と江戸の町の人々との交流も絶え、城壁に囲まれ隔絶した皇居の天皇は、全国を「同視」し、京都など特定の地域社会とのつながりを断ち切られてゆくのである。

さて明治維新でいったん廃絶した賀茂祭であるが、一八七七年の明治天皇の長期にわたる大和・京都行幸の滞在を契機に、「古都」としての文化的「伝統」や歴史を保存し復興してゆこうとする動向が出てくる。それは十九世紀後半の国際社会のなかで、ヨーロッパという単一の文化があるわけではなく、オーストリアは

オーストリアらしい「伝統」や歴史を、ロシアはロシアらしさを、押し出すことが、「文明化」された列強の戦略であったからだ。かくして一八八三年に、荒廃した公家町を京都御苑として整備しそこで即位式・大嘗祭を施行し、賀茂祭や石清水放生会の「旧儀」を復興する内容の、岩倉具視建議がだされるのである。

文永期(十三世紀)の年中行事の絵巻物などを参考にして、儀式が整えられる。そして一八八四年に賀茂祭・石清水祭は官祭として再興され、祭りに奉仕する京都在住の華士族にも下賜金がくだされる。

(京都大学助教授・日本近代史)